

日本史学専修

教授	吉川 真司	日本古代史
教授	上島 享	日本中世史
教授	谷川 穰	日本近代史
准教授	三宅 正浩	日本近世史
助教	松井 直人	古文書室（日本中世史）

〔主要著書・論文等〕 吉川『律令官僚制の研究』塙書房，1998，同『律令体制史研究』岩波書店，2021，同『飛鳥の都』岩波新書，2011，同『聖武天皇と仏都平城京』講談社学術文庫，2018。

上島『日本中世社会の形成と王権』名古屋大学出版会，2010，同『日本の歴史 08 古代天皇制を考える』（共著）講談社学術文庫，2009，同『日本宗教史』Ⅰ・Ⅱ（共編）吉川弘文館，2020～21。

谷川『明治前期の教育・教化・仏教』思文閣出版，2008，同『岩倉具視関係史料上・下巻』（共編）思文閣出版，2013，同『講座明治維新 11 明治維新と宗教・文化』（共編）有志舎，2016，同『「甲子園」の眺め方—歴史としての高校野球』（共編）小さ子社，2018。

三宅『近世大名家の政治秩序』校倉書房，2014，同「江戸幕府の政治構造」（『岩波講座日本歴史』第11巻・近世2，岩波書店，2014）。

松井「南北朝・室町期京都における武士の居住形態」（『史林』98-4，2015），同「室町幕府山城国支配の展開と山城守護—南北朝・室町期を中心に—」（『史学雑誌』131-4，2022）。

吉川教授は、日本古代の政治・社会・文化に関する研究を行っており、近年は寺院史・地域史・文化交流史を中心に検討を続けている。上島教授は、政治・社会経済・宗教文化の側面より、日本中世社会の形成を考察しており、近年は鎌倉・南北朝期へと研究対象を広げている。谷川教授は、近代日本における教育と宗教の関係史を起点として、文化・政治・思想など、明治期を中心に近代社会の形成・展開過程を多角的に検討している。三宅准教授は、日本近世の政治史について研究しており、近世大名家の政治構造や幕藩関係を軸に考察を進め、近世国家の成立過程とその特質を研究している。松井助教は、都市京都と室町幕府との関係史的考察を基礎に、中世後期の政治・社会体制の展開を見通そうとしている。

日本史学専修では、幅広い分野のスタッフを揃え、日本史の統一かつ総合的把握を目指して研究と教育を行っている。他学部や研究所など、学内諸機関から広く講師を迎えているのもそのような意図によるもので、単に日本史の枠内に閉じこもるのではなく、さらに広く国際的な視野から日本史をとらえる姿勢が必要である。院生諸君にはこの点をよく理解し、自身の専門分野を極めることは勿論、常に広い視野と関心を持って研究に取り組んでいただきたい。歴史学はもとより、国語・国文学、考古学、地理学、人類学、社会諸科学など隣接諸科学とその成果に関心をもつことが望ましい。

京大日本史の著しい特色として、実物史料による研究と教育を挙げることができる。古文書室・総合博物館には、三浦周行教授以来、歴代にわたって収集された膨大な古文書・古記録等が収蔵されている。これらは一学部、一研究室の蒐集としては他に類を見ないもので、日頃から学部・大学

院生の教育に用いられる一方、貴重な研究史料として広く学内外研究者の利用に供されている。歴史学の基礎は各時代固有の性格をもった文字史料の正確な読解力にある。院生諸君はこの恵まれた環境を生かし、演習以外にも日頃から古文書・古記録や影写本に親しみ、活字や写真によっては得られない歴史の手ざわりを実物史料によって感得し、それらに対する真の読解力を養っていただきたい。そのためには研究室が行う史料調査や総合博物館の展示に積極的に参加する姿勢が必要である。

本研究室ではまた、院生諸君による各種研究会や夏の古文書研修合宿など、自主的研究活動が盛んに行われている。これらにも積極的に参加し、また自ら組織し、活発な議論を展開してほしい。広く学外の研究者・研究組織との交流も不可欠である。そのためには研究室の主催する学会組織である読史会への積極的な参加も望まれる。博士課程修了時の学位論文提出を目指して、在学中から積極的に学術雑誌等へ研究成果を発表していただきたい。修士論文の公表はその最低の要件であろう。入学時から高い志をもって研究生活に入られることを希望する。

東洋史学専修

教授 吉本 道雅 中国古代史
教授 中砂 明德 中国中世・近世史

上記に加えて、人文科学研究所所属の下記の教員が教育と研究指導に参加している。

教授 矢木 毅 朝鮮史
教授 宮宅 潔 中国古代史
教授 古松 崇志 ユーラシア東方史

〔主要著書・論文等〕吉本『中国先秦史の研究』京都大学学術出版会，2005。

中砂『中国近世の福建人 士大夫と出版人』名古屋大学出版会，2012。

矢木『高麗官僚制度研究』京都大学学術出版会，2008。

宮宅『中国古代刑制史の研究』京都大学学術出版会，2011。

古松『草原の制覇 大モンゴルまで』岩波書店，2020。

東洋史学大講座は、東洋史学専修と西南アジア史学専修から構成される。そのうち、東洋史学専修の対象とする分野は、おもに中国・朝鮮・内陸アジア・東南アジアなどのアジア東方諸地域と、そこで展開する歴史現象の全般である。もちろん、東西交流史など、この枠を超えた分野も含まれる。現在のスタッフのほか、人文科学研究所から協力講座としての教員が加わり、さらに学内各部署や学外からの非常勤講師の協力もえて、多彩な専門教育が行われる。

広く歴史学は、おもに文献と文物(遺物・遺跡など)の二種の史料にもとづく。東洋史学では、従来から、その両方に依拠しつつも、より原典の文献史料に力点を置いた研究・教育を旨としている。対象とする地域・時間の長大さから、当然、扱う原典文献も多言語にわたるが、なかでもアジア東方で最大の文字史料群である漢語文献が中心となる。江戸期以来の「漢学」の伝統に、近代歴史学の方法論を合体させた学問体系には、巨大な蓄積と技術があり、その修得が、まず求められる。これに加えて、朝鮮語・モンゴル語・満洲語・チベット語などの諸語文献についても、学習の機会が開かれている。徹底した文献学の基礎に立った原典史料からの歴史把握こそ、東洋史学の最大の特徴である。

中国史・漢語文献も含めて、あくまで外国史・外国語であるから、それぞれの言語そのものについても修得を心掛けてほしい。諸外国からの留学生も多く、研究室での国際交流も活発である。さらに、日本人大学院生については、みずからすすんで留学・現地滞在などをはかり、ボーダーレスとなった国際学界のなかで自立できる能力の養成が望まれる。また、博士後期課程に在籍するのは、日本人・外国人を問わず、学術誌などへの論文発表をはかるとともに、それらを踏まえた博士論文の作成をめざすよう努めてほしい。

京都大学は、東洋史学を学ぶのに最も恵まれた環境にある。文学研究科図書館をはじめ、人文科学研究所内に設置された東アジア人文情報学研究センターや文学研究科の附属施設である文化遺産学・人文知連携センター(羽田記念館)などが、世界でもまれな東洋史学関係文献の一大宝庫を形作っている。また、専門研究者が、さまざまな方面にわたって、厚い層を形成している。教室内で

も、研修員・大学院生によるテーマごとの研究会が活発に行われている。なお、研究室には全国学会である東洋史研究会の事務局が置かれ、学術誌『東洋史研究』(季刊)を発刊するとともに、毎年1回、大会を催している。

西南アジア史学専修

教授 磯貝 健一 イスラーム期中央アジア史、イスラーム法廷文書研究
准教授 岩本 佳子 イスラーム期中東史、オスマン朝史、遊牧民研究

〔主要著書・論文等〕 磯貝真澄・磯貝健一編『帝国ロシアとムスリムの法』昭和堂、2022年ほか
岩本佳子『帝国と遊牧民：近世オスマン朝の視座より』京都大学学術出版会、2019年
岩本佳子「ワクフのレアーヤー」たる遊牧民：オスマン朝における徴税権の複層化とその影響」
『東洋史研究』第80巻第3号、2021年ほか

本専修では、西アジア・中央アジアなど、主にイスラーム世界の歴史を扱う。本専修に所属する大学院生は、時代的には、古代オリエント史、イスラーム時代史、中東近代史のいずれの分野を専攻してもよい。ただし、現在は、イスラーム時代史に関する講義が多く開講されている。また地域的には、西アジア・中央アジアに限らず、イスラーム諸王朝下のインドや北アフリカ、スペインの歴史など、イスラーム教徒が主役を演じた時代であれば、いずれの地域を専攻してもよい。

演習は、古典アラビア語・ペルシア語・トルコ系諸語などのテキストを使って行われる。従って、大学院入学以前に、これらの言語のうち、最低1つ、望むらくは2つを習得しておく必要がある。未習得の言語については、入学後、別開講されている初級の授業に出席して、それらを直ちに習得することが望ましい。

専修スタッフは、アラビア語・ペルシア語・トルコ系諸語などで書かれた原典史料によって歴史研究を行うことを基本的な姿勢とし、この研究方法を最も重視している。

また、研究を進めるためには、研究史の正確な把握も不可欠である。このため、大学院入学以前に、英独仏露など、できるだけ多くの言語の読解力を養っておくことが必要である。また、留学等の機会に備え、大学院在学中に、これらの言語の内、少なくとも1つについては、その会話能力をも身につけることが望ましい。

本専修がカバーする領域は、特にわが国では、なお未開拓な分野が多い。そのため、専修生は日頃から幅広い勉学を重ね、その蓄積の上に、広い視野から自らの研究テーマを選ぶことが必要である。そして、そのテーマについての研究方法を自ら工夫し、自らの歴史像を構築し、それを歴史の真実の姿に少しでも近づけることが望まれる。

関連施設として、上賀茂に羽田記念館がある。ここには、中央アジア・西アジア関係の文献が備えられ、講演会・研究会などが行われている。

また、本研究室には、関連学会である西南アジア研究会の事務局がおかれ、雑誌『西南アジア研究』が年2回刊行されている。

西洋史学専修

教授	小山 哲	西洋近世史
教授	金澤 周作	西洋近代史
准教授	藤井 崇	西洋古代史
講師	安平 弦司	西洋近世史

〔主要著書・論文等〕

- 小山 哲 『ポーランド・ウクライナ・バルト史』(共著) 山川出版社, 1998, 『近世ヨーロッパの東と西——共和政の理念と現実』(共著)山川出版社, 2004, 『大学で学ぶ西洋史 [近現代]』(共編著)ミネルヴァ書房, 2011, 『ワルシャワ連盟協約(一五七三年)』東洋書店, 2013, 『礫岩のようなヨーロッパ』(共著) 山川出版社, 2016, 『「世界史」の世界史』(共著) ミネルヴァ書房, 2016, 『王のいる共和政——ジャコバン再考』(共著) 岩波書店, 2022.
- 金澤周作 『チャリティとイギリス近代』京都大学学術出版会, 2008, 『イギリス史研究入門』(共著) 山川出版社, 2010, 『海のイギリス史——闘争と共生の世界史』(編著) 昭和堂, 2013, “To vote or not to vote”: Charity voting and the other side of subscriber democracy in Victorian England’, *English Historical Review*, Vol. CXXXI No.549 (April 2016), 『論点・西洋史学』(監修) ミネルヴァ書房, 2020, 『チャリティの帝国——もうひとつのイギリス近現代史』岩波新書, 2021, 『海のグローバル・サーキュレーション——海民がつなぐ近代世界』(共編著) 関西学院大学出版会, 2023.
- 藤井 崇 『知と学びのヨーロッパ史——人文学・人文主義の歴史的展開』(共著) ミネルヴァ書房, 2007, クリストファー・ケリー 『1冊でわかるローマ帝国』(翻訳) 岩波書店, 2010, *Imperial Cult and Imperial Representation in Roman Cyprus* (HABES 53), Franz Steiner Verlag, 2013, 『古代地中海の聖域と社会』(共著) 勉誠出版, 2017, 『歴史の転換期 1 B.C. 220 年——帝国と世界史の誕生』(共著) 山川出版社, 2018, 『論点・西洋史学』(共編著) ミネルヴァ書房, 2020, 『生き方と感情の歴史学——古代ギリシア・ローマ世界の深層を求めて』(共著) 山川出版社, 2021
- 安平弦司 ‘Confessional Coexistence and Perceptions of the “Public”: Catholics’ Agency in Negotiations on Poverty and Charity in Utrecht, 1620s–1670s’, *BMGN – Low Countries Historical Review* 132:4 (2017), ‘Delimitation of the “Public” and Freedom of Conscience: Catholics’ Survival Tactics in Legal Discourses in Utrecht, 1630–1659’, *Early Modern Low Countries* 3:1 (2019), ‘A Swarm of “Locusts”: Pro/Persecution and Toleration of Catholic Priests in Utrecht, 1620–1672’, *Church History and Religious Culture* 99:2 (2019), 「多宗派時代の市民権——宗教改革後ユトレヒトにおける都市共同体再編とカトリック」『史学雑誌』第 131 編 1 号, 2022, ‘Transforming the Urban Space: Catholic Survival Through Spatial Practices in Post-Reformation Utrecht’, *Past & Present* 255 (2022), *Nog meer wereldgeschiedenis van Nederland* (共著) Ambo Anthos, 2022

本専修は、古代ギリシア・ローマから現代に至るまでの西洋世界の歴史的発展を、政治、経済、社会、思想、文化、宗教の諸側面にわたって体系的に把握することを目指して、研究と教育を行って

いる。現在の専任教員4人はそれぞれポーランド近世史、イギリス近代史、古代ギリシア・ローマ史、オランダ近世史を主たる研究対象としながら、上記の課題と取り組んでいる。また、大学院生は各自の問題関心にしたがって自主的にテーマを決めて研究を行っており、その対象領域は専任教員の専門分野をはるかに超えて極めて広い範囲にわたっている。

以上のように本専修では、大学院生に対して何よりもまず自主的・自発的な研究態度を求めており、どのようなテーマを選びそれをどのような方法で解明して行くかは院生の自由である。しかし、自己の専門に狭く閉じこもることは厳に戒めるべきであり、研究室での教員や他の院生との日常的な討論を通じて、また本専修が組織し運営する学会「西洋史読書会」をはじめ、学外の様々な学会、研究会などに積極的に参加することによって視野を広げ、自らの研究テーマの意味を問い直して行くことが望まれる。

研究発表や論文執筆の基本的な方法については大学院演習で習得していくことになるが、自己の研究テーマに関わる方法論の習得と練磨は主として院生自身で行わなければならない。その際希望しておきたいのは、次の諸点である。第1は、いうまでもないことながら、それぞれの分野での先行研究の成果を十分に咀嚼した上で問題を適切に設定し、基本的な史料を用いてそれを解明していかななければならないことである。第2に、西洋史学はきわめて学際的な学問であり、隣接諸科学との関係がたいへん深いので、西洋史学の研究者になろうとする者には、学際的な感性と関連諸学の素養が今後ますます要求されるだろう。第3に、西洋史学の研究の重要な手段である外国語能力の運用に努めることが肝要である。今日のわが国における西洋史研究のレベルは欧米学界と変わらぬものとなり、一次史料に基づく独創性の高い研究ばかりでなく、日本語に加えて外国語によるその成果の公表が要求されるようになってきている。そのためにも、外国語の精密な読解力と合わせて、コミュニケーション能力がこれまで以上に望まれよう。

本専修では、専任教員や本専修を運営の基盤とする研究会が主催する学会、国際シンポジウム、外国人学者講演会などがしばしば開かれるため、大学院生がそうした機会を利用して学会活動に馴染み、また外国留学の準備を進めるなど、授業以外でも専門研究者への歩みを進める環境がある。修士課程を修了して就職する予定の大学院生にとっても、本格的な学会活動や国際的な学術コミュニケーションの場に加わることは、グローバルな活動のための重要な準備の機会となろう。本専修の活動については、西洋史学専修ホームページ (https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/european_history/eh-top_page/) と、オンライン学術誌『フェネストラ——京大西洋史学報』 (<http://hdl.handle.net/2433/234791>) をぜひ参照されたい。

考古学専修

教授 吉井 秀夫 朝鮮考古学

教授 下垣 仁志 日本考古学

上記に加えて、人文科学研究所所属の下記の教員が教育と研究指導に参加している。

准教授 向井 佑介 中国考古学

〔主要著書・論文等〕

吉井『古代朝鮮 墳墓にみる国家形成』（京都大学学術出版会）2010年。

下垣『古墳時代の国家形成』（吉川弘文館）2018年。

向井『中国初期仏塔の研究』（臨川書店）2020年。

本専修の基礎となった「考古学講座」は、1916(大正5)年に濱田耕作によって設置された。これは、わが国最初の考古学講座である。つづいて、梅原末治、有光教一、小林行雄、樋口隆康、小野山節、山中一郎、泉拓良、上原真人の各教授のもとで、徹底した資料の観察とその分析を重視する学風が築かれ、深められてきた。1996(平成8)年度にそれまでの講座制は廃され、大学院を重点化した新制度のもとで現在に至っている。

考古学は、過去の人間が作り、使用した「物」を材料に、過去の人間の行動を研究する学問である。材料となる「物」は、主に発掘調査によって獲得する。考古学研究の基礎となる「物」から過去の人間の「行動」を復原する手法、発掘調査によって必要な情報を獲得する手法や知識などは、学部学生の間にある程度まで身についたものとして、大学院教育は進められる。

考古学の研究対象は、人間生活の痕跡さえあれば、時間的・空間的な限定はない。厳密な発掘調査によって、さまざまな情報をもつ「物」＝データを集める。その「物」のあり方から、直接「物質文化」を認識し、背後にある「精神文化」を読みとり、それらの個々の研究成果の統合をめざす。一方、現代の考古学においては、例えば動植物遺存体の遺伝子観察など、科学的でミクロな分析も、過去像の復原に大きな成果をもたらしつつある。考古学を学ぶ者は、自らその分析を実施する必要はない。だが、少なくとも、生物学・化学・物理学・地質学・土壌学など、自然科学分野の分析技術やその最新成果に深い関心を払う必要がある。資料の分析を自然科学者に託すとき、一体、何を求めるのかは考古学者の責任である。また、製作者・使用者の直接の証言を得られない考古資料を解釈する上で、歴史学・地理学・民俗学・民族学・文化人類学・社会学など、他の人文・社会科学分野の知識もできるだけ身につけて欲しい。

本専修の大学院で考古学を学ぼうとする人は以下の点に留意されたい。

① 大学院で考古学を学ぶことは、すでに研究者の末端に連なったという自覚を持って欲しい。

他の研究者との協力、後輩の指導にも積極的になっていただきたい。それが自分の学業の成就とも密接に関わるはずである。

② 「物」を観察し分析すると、人間の「行動」が見えてくる。考古学は「物」を資料とする科学であると言いながら、その過程には鋭い感性や直感を必要とする。これには先天的な面もある

が、研究者との交流や、発掘現場などを通じて養う点も少なくない。機会を捉えては、積極的に研究会・発掘現地説明会など、さまざまな場に参加していただきたい。

- ③ 研究の基礎資料を得るために、他大学や行政機関・博物館・研究所などを訪問する機会はさらに増えるであろう。当然のことだが、その場合は、礼儀を尽くし、できるだけ迷惑のかからぬような配慮が必要である。研究者としての行動は、自分だけでなく、所属する組織や後輩・同僚の評価となることを忘れてはならない。



大阪府茨木市青松塚古墳石室（左）と
石室内発掘調査風景（上）